



# おおあし

1月 特別号

《 大芦小HP <https://oashi-e-konosu.edumap.jp/> 検索 》

## 大芦地域の歴史・伝説について

学校評議員より、子どもたちにぜひ、地域の歴史について教えてほしいという要望がありました。3年生社会科で「鴻巣市」については学習しますが、各学校所在地の細かいことまでは授業では扱いませんので、今回、『吹上のむかしのはなし』（編集 吹上町教育委員会 発行 吹上町印刷 株式会社 ぎょうせい 平成4年3月30日発行）から紹介させていただきます。（掲載にあたっては、鴻巣市教育委員会から了承を得ております。）  
なお、「注」については私が、岩波書店『広辞苑』第三版より引用しました。

### 「大芦村のはじまり」

吹上町には、太平記（鎌倉後期から室町前期の南北朝の動乱を書いた戦記）で活躍した、南北朝の武将、新田氏の遺臣（注1）が住みついたと言う言い伝えが、いくつか残っています。

元弘（げんこう）三年（1333）新田の荘内（注2）、生品（いくしな）明神の社殿の前に、新田義貞以下一族三十余名、兵百五十が集まり、笠懸（かさかけ）野に打って出ました。従う一族の中に、新田の荘に隣接した境町堀口の住人、堀口貞満や弟の行義ら堀口党の人々がいました。

新田軍は向かうところ敵なく、十日余りで鎌倉に攻め上がり、北条勢と戦い、三日目にして大勝利、元弘三年、百四十年あまり続いた鎌倉幕府はついに滅びました。

ところが、足利尊氏の台頭により新田義貞は、わずか数年で鎌倉を追われ、越前の国で戦死、堀口貞満は行方知れず、弟行義は新田の荘に戻り再起をはかりました。

正平七年（1362）行義は北畠親房（きたばたけちかふさ）、新田義貞の子義宗、後醍醐天皇の子宗良親王と共に再び立ち上がり、鎌倉を落としました。しかし、老練な足利尊氏のため、またも鎌倉を追われ、現在の埼玉県嵐山町と鳩山町の境の笛吹峠・將軍沢で尊氏勢と対陣しました。

その行義の陣所（注3）に子供を連れた狩人が現れました。今は入間野の百姓となっている兄貞満です。貞満は「嫡子（注4）は京へ上り戦っているが、ここでの妻の子が二人いる。その一人を連れて故郷の堀口へ帰ってくれ」と言うと、さっと姿を隠しました。

戦いは行義らに利なく大敗し、大将新田義宗は越後へ走り、行義はその子らを連れて逃げました。そして、大きな芦の原（現在の大芦辺り）へ迷い込み、足利氏の追及（注5）の厳しい故郷へ帰れず、前砂に逃れた新田氏の遺臣もいて、この辺りを開拓したと伝えられています。

新田義貞…南北朝時代の武将。上野国新田郡の人。1333年（正慶2）鎌倉に入って北条氏を滅ぼし、左兵衛督に叙せらる。36年足利尊氏を九州に走らせたが、東上した尊氏を兵庫に防いで敗れる。恒良親王・尊良親王を奉じて越前金ヶ崎城に拠り、陥落。再挙をはかったが藤島に戦死。

足利尊氏…室町幕府初代将軍。初名は高氏。後醍醐天皇の一字を賜って尊氏と称した。元弘の乱に六波羅を陥れて建武新政のきっかけをつくったが、後叛いて光明天皇を擁立、征夷大将軍となり、室町幕府を開いた。

注1「遺臣」…前代から使えていた旧臣。王朝・主家などが滅亡してあとに遺っている旧臣。

注2「荘内」…領土の内。

注3「陣所」…陣営。

注4「嫡子」…嫡妻（本妻）の子で家督を相続するもの。

注5「追及」…あとからおいつくこと。

## 「勝負沼のはなし」

昭和三十年代まで、現在の吹上団地や大芦小学校の辺りは、小さな沼や堀の入り組む湿地帯で、土地の人々は「勝負沼」と呼んでいました。

千年近くも昔のこと、京の都から清和天皇の孫、源経基という侍が、武蔵国の介（注1）という官につき東国へ下行（げこう）してきました。そして、鴻巣市の大間へ落ち着き、館を造り、前から箕田に住んでいた嵯峨源氏（注1）の源宛（みなもとのあつる）とも仲が良くし、日々文武に精を出し、人々に慕われ、平和に暮らしていました。

ところが、ある夏、天候が不順で、大雨が続き、荒川が荒れ狂い田畑が冠水して、領地の境えもわからなくなってしまいました。ようやく秋になり、雨も上がり、田畑では乏しいながらも稲も実り、芋もとれましたが、冬を越すのには十分とはいえませんでした。幸い沼や池に自生する菱の実（注3）が豊作でした。人々は越冬食の足しにと遠くまで菱の実を求めて出かけました。ある日、菱ばかりでなく、慈姑（くわい）もとれる沼を見つけました。みんなで夢中でとっていますと、一団の侍が現れ、弓矢を射かけてきました。平将門（たいらのまさかど）の叔父で、熊谷市の村岡に居を構える桓武平氏良文の家来たちです。みんなはほうほうの体で逃げ帰り、経基や宛にその様子を話しました。

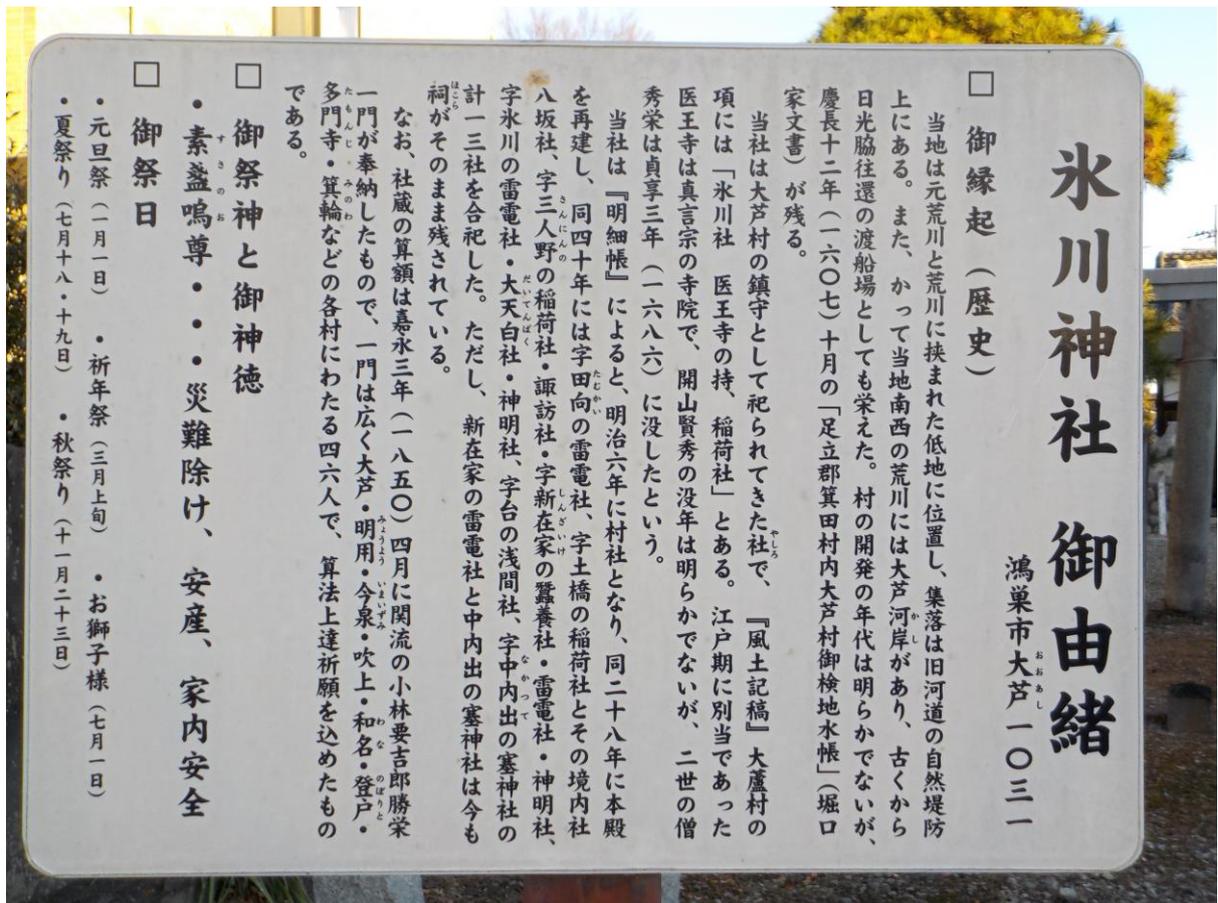
すると、経基は「私は武蔵国の介である」と大いに怒り、兵を率いて村岡に向け出陣しました。ところが、良文も武勇で鳴らす人、経基等より先に出陣し、両者は吹上で激突しました。激戦が繰り広げられましたが勝負はつかず、大間と村岡の中間の沼をはさんで、宛と良文両者が弓矢で決着をつけることになりました。

しかし、それでも勝負がつかず、互いの武勇をたたえ合い仲直りしました。その沼は、「勝負沼」と呼ばれたと伝えられています。

注1「介（すけ）」…（助の意）令制の諸官司に置かれた四等官の第二位。長官を補佐し、長官事故があるときはこれに代わるもの。

注2「嵯峨源氏」…嵯峨天皇の諸皇子で源氏姓を賜って臣下となったものの子孫。

注3「菱」…種子は食用。



## 「長池のはなし」

大芦の氷川神社の境内にある集会所のわきに、填長淵記（てんちょうえんき）という大きな根府川石（ねぶかわいし）があります。これは、その碑にまつわる話です。

文政七年（1824）秋の荒川の大洪水で、明用村の大囲堤が八十余間も（注…一間は約1.818メートル）決壊し、跡に大きな池ができました。その後ますます池が大きくなり、大芦や久下（くげ）村地内の荊原（ばらはら）にも達し、人々は長瀨（ながとろ）または長池と呼んでいました。

そのころは、大囲堤（今の堤防、ただし当時は今より大分低かった）とその本流側に畑囲堤（はたがこいつつみ）という小さな堤がありました。また畑囲堤の本流側には、綱引道という風のないときや逆風のとき上流へ舟を引いて行く小さな道がありました。長沼は大囲堤の下にありました。

文政七年（1824）、安政六年（1859）、万延元年（1860）、元治元年（1864）、慶応四年（1868）と大洪水が続いてこの辺りを襲いました。とくに、安政六年の洪水は、「未年（ひつじどし）大水」と語り継がれるほどの大洪水でした。これにより、長池はさらに下流へ広がり、三町免を経て小谷の小城ヶ池（おじろがいか）や駒ヶ池、さらに糠田（ぬかた 鴻巣市）の蚊帳ヶ淵（かやがふち）へ続き、本堤（ほんてい）を堤敷（ていしき）から脅かすようになりました。

関係四十か村の名主一同は、幕府に長池の埋め立て工事を再三申し立てましたがなかなかはかどらず、やっと約六十年後の明治十八年十二月から十九年六月に、人夫延べ八万五千人、総工費一万九千五百余円を費やす大工事を行い、長池は埋められました。その工事のことを記したのが、氷川神社にある填長淵記の碑です。

工事の際最後に残ったのが明用池（今の総合運動場）の南の大池ですが、それを埋め立てる際のこんな話が語り継がれています。長池で最後の漁をしていた漁師が一人の妙齡な娘に出会ったというのです。娘は漁師に八丁湖（はっちょうこ 吉見町）への道を尋ね、教えてもらおうとパツと消えたというのです。後で、それは長池の主の大蛇が娘に身を変え、八丁湖へお移りになった、と人々の噂になりました。

池の跡は割地（わりち）という名で、今も村中の人々が所有しています。

---

氷川神社について…

御祭神は素戔鳴尊（すさのおのみこと）です。素戔鳴尊はヤマタノオロチを退治した神です。

『倫風 1月号』（一般社団法人実践倫理宏正会 発行 令和5年1月1日）

「時代を読む」（詩人 鎌田東二 かまたとうじ）より

日本は火山が火を噴き、頻りに地震が起こり、毎年のように台風や洪水に見舞われる国でもあります。日本神話にも災害を想起させるものが数多くあり、その一つがヤマタノオロチです。これは八つの谷を渡るほどの大きな体を持ち、頭が八つ、尾が八本、表面には苔や杉が生え、目はほおずきのように赤く輝き、腹が血で真っ赤にただれているというモンスターです。毎年出雲を訪れ、人間の娘を食べてしまう。そこにスサノオが立ち向かって退治し、尾から草薙（くさなぎ）の剣を発見するという物語が展開します。

本当にこんな生き物がいるはずはありませんから、現代ではさまざまな解釈がなされています。毎年のように発生する台風や洪水を怪物に見立てたという説もありますし、血でただれる腹が炎を連想させ、尾から剣が出てきたことから当時の製鉄文化との関わりも指摘されています。

……大蛇は「暴れる川」「荒れる川」すなわち「荒川」を表し、大蛇を退治したということは、荒川を治めた、それが素戔鳴尊というわけです。お祭りするのが「氷川神社」です。

## 「舟頭 佐治兵衛（さじべえ）のはなし」

大芦の氷川神社に「享保（きょうほう）十九年（1735）甲寅（きのえとら）八月吉日奉納 宝前（ほうぜん）江戸本材木町七町目石屋佐治兵衛」と刻まれた手洗石があります。

この石は大芦河岸舟頭として出発し、後に女房の内助の功で大商人となった大芦の佐治兵衛が奉納したものです。

宝永四年（1707）の富士山大噴火のころから、東国でも綿の栽培が盛んになり、その肥料に干鰯（ほしか）が使われるようになりました。

干鰯は九十九里沿岸でとれた鰯を日乾しにして加工したもので、九十九里から江戸の間屋へ運ばれ、そこから川舟で内陸の農村へと運ばれました。その干鰯を江戸から大芦河岸まで運んでいたのが佐治兵衛です。

ある夏のことです。佐治兵衛が問屋で干鰯を積み、風待ちのため二日ほど江戸に滞在していると、子供連れの武家の内儀（注1）に声をかけられました。その内儀の話によると、夫は東松山の陣屋（注2）の役人で、江戸へご用のために出府中（注3）に急死し、夫の骨を納めに東松山へ帰るとのこと。見れば小さな子供を連れて難儀している様子、佐治兵衛は仲間に話をつけ舟に母子を乗せてやりました。

それからしばらくして、佐治兵衛が炭の舟荷を頼まれ問屋へ行ってみると、そこでかの内儀の姿を見つけました。わけを聞いてみると、その後、子供を亡くし、知行（注4）を失ったのでこの店で働いているとのこと。佐治兵衛は早速店の人に話をつけ、その女（ひと）に自分の所で働いてもらうことにしました。

当時の大芦河岸は木材の集散地として栄え、木挽き（製材工）もいて不用な背板がたくさん出ました。それは燃料用にただのような値で売られていましたが、彼女はそこに目をつけ、江戸の生活を生かして背板を薪にして舟で江戸へ運んで売ることを思いつき、夫の佐治兵衛に言いました。これは大当たりし、佐治兵衛はこれを皮切りに肥料用の腸樽（わただる）や鳥羽（とりはね）を江戸から運び、帰り舟で用材や石材、薪を江戸へ運んでもうけ、江戸本材木町に店を構えるような大商人になりました。佐治兵衛は年上女房の内助の功で、後に本材木町の肝煎り（注5）にまで出世しました。

注1 「内儀」…身分のある人の妻。

注2 「陣屋」…城郭のない小藩の大名の居所。

注3 「出府」…江戸時代、幕府の所在地たる江戸に出ること。

注4 「知行」…上位者から与えられた所職や所領を支配すること。また、家臣に恩給された領地。

注5 「肝煎り（きもいり）」…名主・庄屋の異称。

氷川神社 本殿

